「ホタルイカ(上)」 90年前に漁が確立

必要な資源管理

午前2時半、港に漁師たちが集まり出した。エンジンを始動させ、カッパに身を包んだ漁師たちが乗り込むと、港から15分足らずの漁場を目指し次々と船が出港していく。3月から7月初めまで毎日見られる風景である。

富山湾ではほぼ全てのホタルイカが定置網漁によって獲られている。定置網は、ホタルイカを獲る部分だけでも数十メートルもある袋状の網を、海の定まった場所に仕掛けておき、ホタルイカが自ら網に入り込んだところを獲る漁法である。魚を追い求めて獲る方法ではないので、わずかしか獲れない日もある。そのかわり、乱獲の心配は小さく、漁獲物が船に引き上げられるまで生きているので、富山湾産のホタルイカは鮮度が抜群だ。

手元に、ほぼ90年前に富山湾のホタルイカ漁について書かれた論文の写しがある。すでに当時から富山県では定置網漁が盛んであったこと、現在と同じ漁場名が当時にもあったことがわかる。この論文が書かれた時、すでに富山湾ではホタルイカの定置網漁が確立していたことを考えれば、この漁業は資源を絶やすことなく、実に長い間受け継がれてきたと言える。環境破壊が叫ばれる昨今、自然と人間の理想的な関係をここに見出すことができる。

富山湾のホタルイカは一漁期に平均で約2,000トンの水揚げがあり、10億円前後の富を生む。ところが、約20年前からは若狭湾や山陰の沖でも、ホタルイカを獲る底曳網漁業が始まり、多い時には富山湾の2倍以上獲られるようになった。今のところ乱獲の兆候は見られないが、ホタルイカの恩恵を末永く子孫に伝えるためには、今のうちからしっかりした資源の管理を行っていく必要があろう。（内山勇）

富山湾で行われているホタルイカ漁